

廣末保著

元祿文學研究

東京大學出版會

著者略歴

1919年 高知縣に生る

1941年12月 東京大學文學部國文學科卒業

1942年1月より終戦まで、日本出版文化協會（日本出版會）に勤務

現在 法政大學教授、日本文學協會々員

著書

「芭蕉」、岩波新書「日本文學の古典」（西郷信綱、永積安明兩氏との共著）

現住所

東京都練馬區南町3の5944

元祿文學研究

1955年5月30日 第一刷發行

検印廢止

定價 480 圓

著者	ひろすえ	たもつ
	廣末	保
發行者	有澤	廣巳
印刷者	山田	一雄

發行所 財團 東京大學出版會

東京都文京區本富士町1、振替東京 59964

精興社印刷・欠鴨製本

目次

序にかえて

元祿文學の成立をめぐる問題 一

芭蕉

一 芭蕉論 一七

1 ルンペン町人的生き方と亡命について 一七

2 芭蕉の位置——人間形成の挫折をめぐって 二七

3 談林の集團性と芭蕉の孤立性 三七

4 かなしみと風流の虚構 四五

二 芭蕉の傳統と近代化 五五

——俳諧の方法をめぐって

1 はじめに 五五

2 芭蕉の精神と方法について 五七

3	俳句の近代化について——子規と碧梧桐を中心に……………	七〇
4	俳句の近代化について——プロレタリア俳句以後と第二藝術論……………	八五
三	風流と俳諧性……………	九七

西 鶴

一	西鶴論の再検討について……………	一三三
二	俳諧から浮世草子への展開……………	一二九
三	好色一代男論……………	一三二
1	その成立の時点について……………	一三三
2	浮世草子ジャンルの成立と方法……………	一三八
3	ロマンの挫折——好色生活と町人生活の分裂……………	一六〇
四	西鶴・浮世草子の展開……………	一七一
	——その素描……………	
1	二代男——五人女——一代女……………	一七一
2	日本永代藏——世間胸算用——西鶴置土産……………	一八〇

近松

一 近松論	一五
-------	----

1 はじめに	一九
--------	----

2 近松の世話物のテーマ	一九
--------------	----

3 語り物の傳統と近松の悲劇	二三
----------------	----

二 近松と義理	二三
---------	----

三 近松と町人倫理	二九
-----------	----

——文學史と歴史學

四 近松の作品	二九
---------	----

1 「女殺油地獄」についての覺書	二九
------------------	----

2 「堀川渡鼓」とお種	二七
-------------	----

3 「心中天網島」と「時雨の炬燵」	二六
-------------------	----

4 「傾城反魂香」と「吃又」	二九
----------------	----

附 論

歌舞伎論の課題	二〇
---------	----

——歌舞伎論争の論點をめぐって

あとがき	三七
------	----

序にかえて 元祿文學の成立をめぐる問題

普通、元祿文學という呼び名で扱われている文學史の一段階を再検討してみたいと思う。元祿文學といわれる文學史の一段階は、いつからはじまるか、私は、その起點を芭蕉が芭蕉庵に入り、西鶴が「好色一代男」をかいた一六八〇年前後におくことができると思う。この考えには今更なんの新しみもない。しかし、この一六八〇年前後の動向をどう理解するかということが問題である。その理解の仕方によって元祿文學そのものの位置づけも變ってくるように思う。別のいい方をするなら、元祿文學という特定の世界を文學史のうえに設定する必要があるかどうかにもかかわってくると思う。

從來の元祿文學論についていえば、それぞれ對立した見解をもっていたにしても、その成立論についてはほぼ一致していたといえる。つまり、所謂・近世文學の時代に入って、文學は庶民、特に町人階層の手にうけつがれていったが、近世初期からの町人文學が一六八〇年頃から急速に發展し開花したのが元祿文學であるというのである。むろん、そこに何らかの發展のあったことは疑いえない。しかし、それは果して、近世初期から展開してきた町人文學のそのままの延長線のうえに發展し開花したものであろうか。私にはそう思えないのである。

近世初期からはじまる町人文學の發展を支えていたものは町人階級の階級的發展であるといわれる。そう考えでも大過あるまい。しかし、その町人階級がおしすすめていた新しい人間形成は、一六八〇年前後に或る種の危機に直面していると思う。少なくとも、文學のうえでは、一六八〇年前後の動向にそういう危機が反映していると思う。結論めいたことを先きにいうなら、元祿文學は、それまで展開してきた町人文學が、この危機と直面し、それに對應してゆく過程で成立していると私は考える。このことは、文學と社會の關係自體が相當大きく變化したことを意味する。一六八〇年前の文學は、新しい近世封建社會の發展、とくに町人階級の發展の比較的素朴な反映として成立しているが、一六八〇年前後を境としてあらわれる元祿文學は、封建社會の矛盾と（町人階級の階級的矛盾を契機として）對立し、その社會的矛盾のもたらす人間疎外とどう對應してゆくかという形で成立してくる。

いうまでもなく、近世初期文學との機械的な斷絶などはありませんし、その傳統と成果をふまえることなしには元祿文學は成立しえないが、しかし、そこには同時に大きい質的な變化があった。こういう觀方の正否については、私の芭蕉、西鶴、近松の各論について検討、批判していただきたい。ともかく、こういう意味で私は元祿文學の成立という問題をあらためて問題にしようとした。むろんそれは元祿文學——芭蕉、西鶴、近松——らの文學に對する評價にも關係する。

元祿文學は新興町人層の文學であり、そういう點からいって、西鶴の浮世草子がもっとも代表的・前進的な文學であるというのが極く常識になっている。いまここでこの考え方について論評しようとは思わない。（實際は、

元祿文學のなかで何が第一ジャンルであるかということも断定し難い。むしろ、そういう第一ジャンルが成立しなく、浮世草子、俳諧、淨瑠璃という三ジャンルが鼎立して當時の民衆の文學的要求にこたえていたということが問題になってくるのである。それはともかく、町人層のエネルギーということを無視しては、ひとり西鶴にかぎらず元祿文學全體の成立を考へることはできないといえよう。しかし、町人階層のエネルギーというようなことを萬能藥のようにふりまわしてみても、元祿文學の問題はなかなか具體的にわかつてこないのである。戦後、林基氏・松島榮一氏らの歴史家から町人階層の複雑な性格についての指摘が國文學者に向つてなされた。商業資本によつて支えられていた當時の町人階層の階級性を恰もブルジョアジーのその如く錯覺していたわれわれ近世文學史家は少なからず動搖した。そして、このことは西鶴の評價を一時混亂におちいらせた。しかし、このような歴史家の指摘は、混亂と同時にわれわれの西鶴研究、ひいては元祿文學研究のゆきなやみを救つて、新たな道をつけてくれるかのようにも思われた。西鶴なら西鶴をありのままにみようとするとき、從來の方法では解きえなかつたいくつかの矛盾も解けそうにみえたからである。だが、結果からいうと、この問題は、元祿文學の研究に對する本質的な反省にまでは發展しなかつた。西鶴や元祿文學一般に對するいままでの評價を少し割引きするといふだけで終りそうになった。つまり單なる量の問題として扱われた。たまたま質的な再檢討に及んだかと思うと、それは、封建權力に寄生的な商業資本の生みだした元祿文學は頽廢の文學であるというような意見になりがちであつた。文學と社會の關係を素朴な反映論で割り切ろうとするこのような考え方は、むしろ支配的なものにはならなかつた。しかし、支配的なものにならなかつたからといって問題がかたづいたわけではない。西鶴や元祿文學の價値をいまま

でよりも割引きするだけですませようと姑息なやり方をつづけている以上、この機械的な元祿文學頽廢論をも否定しざる權利がないということに氣づかねばならない。商業資本や町人階層の矛盾をふまえながら、それにもかかわらず、元祿文學という發展的な文學史上の一段階が生れてくる關係をあきらかにしなければならぬのである。そしてそのためには、元祿文學の成立の仕方そのものを再検討しなければならぬ。

だが、ここで一言ことわっておきたいと思う。それは、商業資本や町人階層についての反省だけから、元祿文學の成立を再検討しようというのではないことである。

元祿文學の成立をめぐる再検討は、文學史のうえからも當然おこなねばならなかったのである。つまり、芭蕉や西鶴や近松の文學が殆んど同時的に、或は踵を接して成立してくる條件を、別々にではなく統一的に考えようとすれば、もっと早く從來の成立論に對する疑惑が生じてこなければならなかったのである。

西鶴の評價についての割引きは行われたが、西鶴の浮世草子が成立してくる歴史的な必然性については依然として新興町人の意欲の發展(割引きされた程度で)によって説明されていた。浮世草子の前の段階である談林俳諧を支えていた町人のエネルギーがそれなりにますます發展上昇し、ついに浮世草子というジャンルを生み出したというこの考え方が正しければ、われわれは、あくまでも、「談林俳諧から西鶴の浮世草子への發展」という方向を基準にして、芭蕉や近松を評價しなければならぬ。ところで、もしそういう立場をとるならば、談林から蕉風へという芭蕉の方向は、町人階層の發展からそれた保守的な方向だということにならうし、近松のように、町人社會から脱落して心中したりする者の芝居をかけたことも、町人階層の發展的な力を正しくとらえることができ

なかったために、保守的だということになる。事實、このような考え方にたつ研究も進んでいた。それはそれなりに方法論的には一貫しているといえよう。しかし、實は、方法論の一貫性を保つために、遂に芭蕉や近松の作品からうける實感をも無意識のうちに切りすてなければならぬ結果に陥っていたのである。それに對して、芭蕉や近松の價值をも西鶴と同様認めようとする研究家たちは、どういふ方法でそれを理論化したであらうか。いま、西鶴と芭蕉の評價について一例をあげてみよう。

「けだし寛文・延寶期の宗因や了意や芭蕉に見られる知的性格の刹那的享樂思想は、内より盛上る生命力のおのづからなる表現ではなくて、その身分に規定された傳統的な彼等の中世的世界觀が、季節風の如く吹きまくる町人階級のブリミティヴな現實謳歌のさ中に迷ひこんだ動搖混亂のうちに形成された一時的な過渡的生解釋であつたのであり、それは又興奮、鎮靜と共に本來の自己に立歸るべき性質のものであつたのである。」(一)(傍點・廣末)

「熾烈な時代思潮に眩惑されて、了意や芭蕉が一應享樂的傾向を示したものの、身分によつて規定された中世的教養の故に、我知らず享樂の對象として月雪花紅葉の自然美を擇んだ不徹底さを止揚して、ここには(西鶴の『一代男』)明かに經濟力を背景とした肉體的悅樂の主張が見られるのである。」(二)

「その頃、世はあげて新興町人勢力を背景とする談林俳諧に傾いてゐた。もちろん、芭蕉もその傾向の中に在つたのである。それは、抒情詩形式としての十七音および十四音詩型を單位とする連句形式によつて、新時代の風俗をうたふ敘事詩であつた。その内容に即して「敘事詩より散文へ」向つたのが西鶴であり、反對に敘事詩的傾向を止揚して、俳諧を本來の抒情詩

へ導きつつあつたのがその頃(延寶八年頃)の芭蕉なのである。」(3)

「彼(芭蕉)の求めた人間は、非社會的・形而上的人間であつたが、その時代にあつて個人の自由と解放は、そのような性格においてのみ把握さるべきものでつたのである。

芭蕉の詩と生活を現象的に見て、その消極的・隱遁的性格を指摘し、抹殺しようとする人々に芭蕉のこの積極的な人間道求のエスプリを知ってもらいたい。」(4)

右の四つの文章は、一人の研究家が、その一つの著書のなかで述べている文章である。(1)と(2)は、西鶴を積極的に評價しようとしている箇所にでてくる文章であり、(3)と(4)は、芭蕉を積極的に評價しようとしている箇所にでてくる文章である。(1)(2)の論法と(3)(4)の論法とはあきらかに矛盾している。西鶴をもちあげるときは町人層の力ということを積極的に評價し、それからはずれる芭蕉を中世的で、月雪花紅葉の自然美をえらんだ不徹底な人間として批判し、芭蕉をもちあげるときは、その時代にあつて個人の自由と解放は、非社會的・形而上的なところにかありえなかつたといひ、芭蕉の詩と生活を現象的に見て、その消極的・隱遁的性格を指摘し抹殺しようとする人々に抗議しているのである。そして、このような矛盾した論法を調整するものとして、「敘事詩から散文へ」という方向とは違つた、抒情詩というジャンルの特殊性を主張している。なるほど、詩と散文というジャンルの相違は大事な問題である。しかし、右のような矛盾した論法を調整するために、このジャンルの相違をもちだすのは感心できない。少なくとも効果はない。俳諧詩と散文の相違はあまりに手輕

に利用されている。「敘事詩的傾向を止揚して、俳諧を本來の抒情詩へ導きつつあった」のが芭蕉である、という展開のさせ方は、その限りでは問題がないようだが、西鶴を扱う方法とくらべると、「止揚」とか「抒情詩」とかいう言葉が、二元論を調整するために都合よく使われようとしていることに氣づく。敘事詩や小説を扱うときは現實とか階級とかいうものを重視するが、抒情詩を扱うときは、重視しなくてもよいという前提が働いているのである。そう思っていないにしても、結果としてそうなっているのである。よく、芭蕉は本來詩人であつた、とか、芭蕉は詩を純化しようとしたとかいう言葉が使われるが、詩とか純化とかいう言葉がマジック・ワードとして使われている場合が多いのである。そして、結局、俳諧詩は、中世的であつても、いや、非社會的・形而上的人間を追求しても庶民詩として發展できるという奇妙な論理がうまれてくるのである。むしろ、私も、「彼の求めた人間は、非社會的・形而上的人間であつたが、その時代にあつて個人の自由と解放は、そのような性格においてのみ把握さるべきものだったのである。」とかいた論者の氣持を全然理解できないわけではない。しかし、ここで私がいいたいのは、「抒情詩」とか、「止揚」とかいう言葉を使つても、西鶴評價の方法と芭蕉評價の方法との間にある非統一的な二元論は調整できないということなのである。なぜ、こんな無理をしなければならなかったか。

西鶴と芭蕉の價值を同じく認めようとするとき陥つたこの二元論的傾向は、一般的傾向であつた。私がここに引用させてもらった文章は、むしろ理論的であるだけにそういう二元論的傾向を典型的にみせているのである。そしてこのような方法上の缺陷をはつきりみせてくれることは問題の所在をあきらかにしてくれるうえで役

立つ。(この論者は實感を尊重し、何れか一方を切り捨てなかった。その點正直である。ただその實感を理論化するのに強引な飛躍をしなければならぬ羽目に陥つたのである。いうまでもなく、これについては從來の近世文學史家全體に責任があり、一研究者の問題ではない。だからこそここに取りあげたのである。)

芭蕉が西鶴の文學を「淺ましく下れる姿」と非難したといわれるように、假りに、芭蕉と西鶴という二人の文學者の「主觀」は激しく對立し否定しあつたとしても、客觀的な文學史の發展にそくしていえば、そのいずれか一方を否定したりするのではなく、共に日本文學の内容を擴大・發展させていったものとして評價しうる場合がある。芭蕉と西鶴の場合がその一つの例である。元祿文學のなかで、浮世草子・俳諧・淨りという三つが同時的に殆んど相對的な比重をもつて、その存在を積極的に主張しえたという祕密ともそれは關連している。とくに、元祿文學の場合、それら三つのジャンルは、三つの異つた認識形象の方法を確立していったというだけではなく、三つの異つた現實をその對象として分けもつていたともいえる。つまり、そのことは、近世封建社會と人間の關係を集中的・統一的にとらえるような中心的な階級が充分成熟しえなかつたことと關係するのである。

元祿文學におけるもっとも先進的なジャンルはなんであるか、という問いに簡単にこたええないのはこのためである。このような元祿文學に固有な問題を充分確認することができなかったために、西鶴か芭蕉かという二者擇一の方法が生れた。人が西鶴と芭蕉のいずれにひかれるかは自由であるとしても、その主觀によって文學史を構築することはできない。そればかりか、主觀的には對立し否定しあひながらも相對的にその存在を主張しえた複雑な歴史的條件を無視しては、その歴史的條件と對應するそれぞれの作家の、主觀的なきびしさをも理解しえな

いといわねばならぬ。しかし、相対的な存在理由を認めるということは、その存在を前述したような二元論で説明してもよいということではない。ここに、元祿文學成立論に對する再檢討が要請されてくるのである。

町人階層の問題、二元論への批判から元祿文學の成立に關する檢討は新しくはじめられねばならなかったが、今一つ、作品評價の基準に對する反省からも、再檢討は要請されたと思う。

元祿文學のなかに何らかの新しい文學的價値の創造があるとしたら、それはなんであるか。極く常識的でない方を許してもらうなら、それは、封建社會の反人間的な矛盾に對抗しながら、新しい人間の價値を發見しているということであろう。或は、新しい人間の價値の發見のためにその文學がたかっているということであろう。このことはいまさらくどくと論じるまでもないことで、從來の研究もそのような基準につらぬかれていた。ところで、その場合、その人間的價値の基準はなんであつたかという、それは、近代的人間の前提となりうるような人間性であつた。封建社會の文學が多かれ少なかれ封建的な制約をうけていることは當然であるとしても、その文學がすぐれた古典として成立しているのは、封建的制約を蒙りながらも可能な限りその封建社會の反人間的な矛盾に抵抗して、近代的なものの前提となりうるような道を地ならししているからである。従つて、元祿文學の評價の基準として近代的人間の前提となりうるような人間性をすえたことは當然だといえる。しかし、この場合、その近代的人間の内容が問題であつた。大ざっぱにいつて、その近代的人間の内容は、必ずしも日本の歴史性に媒介されてとらえられず、公式化された範疇によっていきなり處置される傾向があつた。範疇を輕視してよいというのではない。ただ、日本民族が近代的な人間を確立してゆくさい當然考慮されねばならない日本の歴史にかえて

史性を捨象したために、範疇的な網にかかってくるものだけをとらえようとした。そして絶望した。絶望しない場合も、現象的に網にかかってくるものをそのまま本質にまで還元し、現象的にはその範疇的な網にかかっている、さまざまに屈折し相対的な矛盾を含みながらも、歴史的な現實の重みと對決しながら新しい人間性を切りひらいてゐるそのような近代の前提を充分評價することができなかった。元祿文學の傳統をどううけつぎどう克服するかという今日の課題にとつても、この評價の基準に對する検討が充分なされていなければ空中サークスのような議論になるであらう。元祿文學の成立論も、元祿文學はどのような歴史的價值を成立させているかという問題と離れて存在しない以上、この評價の基準に對する反省が成立論の再検討を要請するのは當然である。

このような評價の基準に對する反省は、私についていえば一九五〇年・七月に發表した近松論からはじまった。しかし、このことについては、本書に收めた西鶴論のはじめにふれておいたのでここで多くを語らないことにする。以上要約した三つの觀點が中心となつて、私の芭蕉論、西鶴論、近松論はかかれた。むろん三つの觀點が中心となつてゐるといっても、敘述の形式は必ずしも元祿文學成立論という形式に統一されてゐるわけではない。芭蕉、西鶴、近松をそのときどきの要求に應じてかいたのであつて形式は一定してないが、それら諸論文を一貫するものとして、上述の三つの觀點がすえられており、そうすることによって、元祿文學の成立に對して私なりの照明を與えてみたのである。

最後に、この論文集は、芭蕉、西鶴、近松の順に編集したが、實際にできあがつてゐたのは、近松、芭蕉、西鶴の順であつたことを斷っておきたい。戦後、私は芭蕉と西鶴の勉強からはじめ一九五〇年までは主に芭蕉と

西鶴についてかいてきた。しかし、どうしてもこの二人の文學を一元的に評價する方法がみつからなかった。二元論を克服しようとして、いろいろ無理な理窟を考えだしたりしたが大した發展をみることはできなかった。その行きづまりを私なりに打開できそうになったのは近松の再評價を契機としてであった。近松を再評價し、芭蕉・西鶴にはじまる元祿文學の一つの結實點に近松を置いたとき、はじめて、元祿文學の文學史的位づけの見取圖が描けそうな氣がしたのである。このことはつまらない私事に類するようだが、元祿文學研究史の一側面をもの語っている點があるかもしれないので附け加えておく。

追記

私は本稿で、町人階層の階級性の問題に少しふれた。そして、このことは、一六八〇年の初頭に近世文學が轉換を餘儀なくされ、元祿文學という新しい文學の世界を創造していったその文學史の展開を考える一つの重要な手がかりになると考えた。本論で具體的に論じたが、一六八〇年頃、町人階層のおしすすめてきた人間形成が挫折しかけており、その挫折といかに對應してゆくかという形で元祿文學が成立すると私は考える。一六八〇年前後における町人階層の人間的挫折ということについては、町人階層そのものについての具體的な内容をもっとあきらかにしてゆく必要があるが、それはいま私の任ではない。ただ、西鶴の「一代男」や芭蕉の蕉風俳諧という文學を通して私は推論するのである。町人階級自體についてなされている現在の研究とどの程度合致するか、また合致しないかをしる必要があるし、また、そのまま合致しない場合も、すぐ文學の側からの判斷を撤回するのではなく、逆にそのギャップをどう理解すべきかという方向でひとまず考えてみるべきだと思う。さて、このような文學と歴史學の問題にも關係するが、最近、天和年間に新舊町人の抗争があり、新しく生れ